

第十一軍野戦自動車廠

(漢口)の軍務

福岡県 西山 忠美

大正四(一九一五)年十二月二日、私は、福岡県八女郡下広村大字で生まれました。兄弟は四人で私は次男で元気に育ちました。学校を卒業し、福岡県久留米市の豆腐店へ住み込みで勤めることとなりました。豆腐店の仕事は朝は早く起きての水仕事で、若年の私には、朝の起床と寒い日の水仕事は辛い日々でありました。しかし、生家で一生懸命に百姓を行なっている両親のこと、幼い弟達のことを頭に浮かび、頑張れと自分自身に言い聞かせながら仕事に打ち込みました。

昭和十(一九三五)年徴兵検査を受け、甲種合格でしたが、当時は軍縮時代の影響が残っていて、所謂「甲種くじ逃れ」で現役兵としての入営はありませんでした。

昭和十四年五月頃、両親から福岡県大牟田市に住む叔母の家から養子に来て欲しいとの話があり、どうするかと言ってきました。既に両親と叔母との間で話が纏まっていることであり、養子に入ることを了解しました。

永年勤めた豆腐店に挨拶を行い、叔母が住んでいる福岡県大牟田市桜町に移りました。姓が、西山に変わりました。

昭和十四年の当時は、ノモンハンで満州とモンゴル両軍が激突、日ソ両軍の戦闘へと発展しました。これが「ノモンハン事件」で、世相も戦時色が濃くなって来た時でありました。

知人の紹介を得て、大牟田市の三井鉱山万田鉱に就職することになりました。炭鉱での職種は、電気科保安係で坑内勤務でした。朝は七時から夕方五時までの勤務で、主な仕事は、石炭を掘る電気ドリルの据え付け及び補修でありました。坑内は十五ないし二十に分かれた切り羽があり、電話を受けては坑内を走り回っ

ていました。

昭和十七年七月三十日、第十二師団（久留米市）へ召集令状を受けて入隊しました。世相がきびしくなった折であり、入隊の別れもそこそこでした。入隊した内務班での軍隊生活は、ラッパに始まりラッパに終わる生活で初めは驚きました。早朝ラッパで起こされ、中隊の前庭に整列、週番士官の点呼を受ける。班の中には集合に遅れる兵隊もいて、他の班に遅れた兵隊は、週番士官の点呼後隊内の敷地を駆け足の罰が与えられ、それが終わらなければ朝食にありつけない有様でした。私は入隊前に「軍隊は要領を本分とすべし」と教わっていましたので、朝の点呼にいかしたら遅れないようにするかを考え、夜中に寝袋の中にズボンを引き込み着衣し、起床ラッパが鳴るとともに寝台から飛び出し、上衣を駆け出しながら着て前庭に集合し、他の兵隊に負けることはありませんでした。

軍隊での初歩の教育を受けている中、昭和十七年八月十五日動員下令、直ちに部隊は出動の準備に入りますが、衣服は最初支給されたままであり、南方ではなく

中国方面であろうと考えられました。懐かしい久留米市を離れ、門司港に集結しました。目の前に六〇〇〇トン級の船が停泊していて、八月十七日に乗船しました。船は船舶部隊が乗り組み、船を動かしている模様でありました。船内は木製で二段ベットが作られています。頭をかかめてしか通れない有様で、所々に裸電球がついている程度でした。おまけに船内は異臭が立ちこめていて息苦しい状態でありました。

やがて船舶隊から「各小隊一人、上甲板に集まれ」との伝達があり、私が上甲板に上がると下士官がいて「乗船者は交替で敵潜水艦の監視に当たってもらう、監視の方法は海の水平線に目をやって、異常があった時は直ちに連絡すること。この監視は船が着くまで行なってもらおう。一時間ごとに交替すること」とのこと。わが隊は、左舷の中央での監視に当たることとなりました。

玄界灘を夜半に通過し、船は太陽の方角からみてどろりやら西の方角に進んでいるようで、中国大陸に向かっていくことに間違いないと思えました。航行する

うちに海が茶褐色の帯になり、だんだんその茶褐色の帯の中を航行するようになりました。陸地が見えてきて、これが中国大陸であるかと思っっているうちに大河に入りました。揚子江（長江）を遡上していて、川幅の広いことに驚きました。門司港を出港して三日目に上海に到着しました。

上海の印象は、さすが世界の港湾都市で、兩岸に聳える建物は堂々としたものでありました。上海から南京に向かう列車を三日待ち、八月二十三日に乗車し南京に到着、直ちに乗船し、ここから揚子江を遡上することになりました。対岸は峻険な山が川に迫っているために鉄道の敷設もできず、船によるしか交通の便がないことが分かりました。漢口で下船、漢水には八月二十六日に到着しました。

着任した部隊は、中支派遣軍第十一野戦自動車廠であって、配属されたのは漢口本部補充中隊でありました。未教育の補充召集兵で、内務班には召集軍曹、班長の下に上等兵一人、自分達は二等兵で約四十人で第

一期の検閲まで三カ月の教育を受けることとなりました。この地区は比較的治安が良く、夜半にパンパンと銃声がする程度でした。

教育の中で、漢口、漢陽、武昌の所謂武漢三鎮は、昭和十三年下旬、南京から撤退する中国（蔣介石）軍の主力六十万と日本軍三十万が激突した地区である。作戦は陸海の共同で実施され、海軍は揚子江の遡上軍、陸軍は大別山横断軍と北方迂回軍で、大別山山頂に陣取る中国軍を攻撃しました。険しい山地と多雨により補給は困難を極め、戦死者も続出し、大別山横断軍の部隊に弾薬、食料を運ぶ車両は泥沼化した道路に、馬、車両が嵌まり苦闘が続きました。所謂武漢略戦でした。「お前達のいるこの土地は、先輩の尊い犠牲の上に治安が保たれていることを忘れるな」との話聞き、先輩の苦勞に感謝を捧げるとともに、戦いで戦死された英霊のご冥福をお祈りしました。

第一期の検閲も終わり、それぞれ軍務につくことになりました。第十一軍野戦自動車廠の隊長は、神山悦

雄陸軍大佐で、補給部百人が修理部に属し、中隊長は中丸中尉でした。わが自動車廠の主な任務は、内地から輸送されて来る軍用車両の陸揚げ、整備点検の上前線への車両運搬、故障のために帰されてくる車両の修理と整備を行うことでした。私は、修理部で電気系統の修理と整備に当たり、入隊前の職業が電気に係っていた関係で比較的に楽に軍務をこなせました。

昭和十九年四月に上等兵に昇進した頃、西洋鎮（分廠）へ燃料のガソリンの輸送の命令を受けました。ドラム缶（二〇〇リットル入り）三〇本を中国のハンケで輸送する任務でありました。漢口でドラム缶を船に積み込むのですが、船は小さなハンケで、エンジンは無くて、中央にマストが一本あるのみで、どうして船が進むのか皆目分かりませんでした。

警備のために私と同輩の上等兵の二人が同船することになりました。漢口から出航して揚子江から分かれた運河を通ることとなりましたが、風のある時は、マストに帆を揚げて進みますが、風の無い時は、同船している中国人が運河沿いの道をロープで船を引っ張っ

て行くという、誠に悠長な運搬でした。三日目の夜九時頃、中国人が「シーサン危ないよ」と言って船から降りていなくなっていました。しばらくすると、パン、パンと銃声がし、だんだん近くまで銃声が迫ってきました。

ここで戦闘になっても、我々は四四式の単弾式騎兵銃のみ、相手が何人襲ってきているか皆目分からないし、戦闘で方が一ガソリンタンクに弾が当たったら大惨事になると思い、二人で相談の上船底に隠れることにしました。やがて船の上で足音がし、何か探し物をしている様子でした。どの位時間がたったか分かりませんが、人の気配も無くなり、船底から出て暗闇でドラム缶を点検したら無事であったことを互いに喜び合いました。

翌朝、中国人は船に帰ってきたので、続けて輸送を続けました。四日目の夜半に、前の日と同じく夜襲に遭いました。しかし、前日の経験を生かして無事でしたが、初めての経験から携帯していた食料も喉を通らず、五日目に分廠に到着し任務を終えた時は、体の力

が抜けた思いがしました。帰りは西洋鎮から車両に便乗して帰りましたが、先に夜襲を受けた地区を通る時は、注意しながら帰りました。

昭和十九年の夏、前線へ軍用車両を運搬途中の威寧の山中で敵の襲撃を受けて、我が隊の上等兵が戦死したので、遺体收拾に行くように命令を受けました。私と坂口上等兵の二人が派遣されることになりました。威寧へは、漢口から揚子江を対岸の武昌へ渡るのですが、軍用車両を船に積み込み、着任以来見慣れた揚子江でしたが、中流になると水嵩も増えて、かつ流れも急で、蛇行しながら渡りました。武昌で軍用車両を下ろしましたが、漢寧へはなお約三〇キロあると聞かされていました。敵襲のある地区であるので坂口上等兵に運転を任せ、私は四四式の騎兵銃に実弾を込めて、敵の襲撃に備えることとしました。

程なくすると小高い山にかかり、武昌から二〇キロ程走った山道に軍用車両が止まっていました。辺りを警戒しながら近づくと、古参の上等兵がハンドルにう

つぶせの状態で頭から首筋にかけて血の固まりがあり、床下に血が固まっていました。同乗の二等兵にその時の状況を聞くが、錯乱状態で、おまけに泣きじゃくっていて状況が分からない。そこで状況を判断するに、夏であるので運転席側の窓を開けて運転中、山側から狙撃されたと思われました。

大陸の夏の日没は遅いが、夕方に近くなって来ているので、坂口上等兵と相談の上、夜が明けてから茶毘に付す事にしました。翌朝山から火葬用の薪を引って来て積み上げ、下の部分に大きな薪を多く入れて行ないました。約半日を要し、あらかじめ出発の時に準備して来た、白木の箱に頭部分を中心に納めました。残りの骨は、道路脇に円ピで穴を掘って埋め、ご冥福をお祈りしました。この一連の作業中は、そこが狙撃された地点であり緊張の連続でありました。

我が修理廠から戦死者が出たのは初めてで、隊員全員が正門に整列して英霊を迎えてくれました。

昭和二十年三月、下士官教育を受けるように命令を

受けまして、揚子江対岸の武昌へ。教育は、自動車に関する技術の教育で、運転、整備が主でありました。同年九月一日に技術伍長に昇進しました。

今まで、敵の飛行機の来襲が無かったのですが、来襲も多くなり、宣伝ビラがまかれるようになりました。その内容は「ポツダム宣言」を伝えるものでした。

昭和二十年八月十五日、隊員全員に集合命令が下りました。隊長から、日本は米英を主とする連合軍に無条件降伏したと伝えられました。漢口を中心とする武漢三鎮では戦闘らしいものは無く、日本が戦争に負けたということがどうしても信じられませんでした。

昭和二十年八月末、中華民国軍から武装解除を受けることとなりました。ようやくして日本が戦争に負けたのだと言う実感が湧いてきました。幾日か経ったある日、元の上官から中華民国軍に技術指導を行う旨の連絡を受けました。武装解除は武器弾薬のみで、自動車を整備する機材等は残されていきましたので、直ちに技術指導に入ることが出来る態勢が取れました。中

華民国軍の若い兵隊で困ったことは、言葉が分からないことでした。しかし、手を取りながら指導を行ううちに、心も通い理解し合えるようになりました。

我々は武装解除され武器を持っていないので、民間人でも悠悠々と毛布等を持ち去るのに閉口しました。宿舎には、交替にて当番兵を付けざるを得ませんでした。食事は、炊事班が準備してくれて従来通りでした。

訓練は昭和二十一年四月まで続き、復員の命令が出ました。今まで訓練を受けていた中華民国軍の兵士達から日本に帰らずここに残るようになわれ、心が痛む思いをしました。漢口から乗船し揚子江を下り南京へ向かいました。南京の港は、上流より幾隻もの船が来ていて大騒ぎでした。江上から眺める南京の町は実に綺麗で、電灯が江水に影を作っていました。

南京から列車に乗り上海に到着しましたが、日本に帰る将兵でごった返している復員船に乗船できるか分かりません。その間大休止の状況で、漢口をたっ

てから二カ月が過ぎた昭和二十一年六月九日に、ようやく復員船に乗船する事ができました。

船は午前十時頃海に出て、だんだんと黄色の水から青色に変わって来ました。困ったことは、食事が飯盒の中皿一杯が二日分の食料であり、考えながら二日分に分けて食べました。

引揚げ港は、長崎県の針尾港で二時間程停泊し、その間検疫検査を受けた後に上陸できました。懐かしい日本の地に足を踏みしめて涙が止まりませんでした。

所持品の消毒、復員局からの支給品を頂き、郷里に向かう列車に乗り込みましたが、途中の家々は戦災に遭って無残な状況でありました。

我が郷里の福岡県大牟田市も我が家も、恐らく戦災で壊滅しているのではないかと思っていました。大牟田駅に降りると一面焼け野が原で、遙か彼方まで見渡せる状況でした。我が家の近くまで来ると、この一帯は戦災から逃れて我が家は無事残っていました。

大牟田市の空襲が酷かったのは、荒尾に軍の火薬工場等軍事工場が多かったからではないかと後で聞か

れました。

暫く休息の後、召集される前に勤務していた三井鉱山万田鉱に復職することになりました。昭和二十七年、同社を退職し酒類の小売店を開店しました。その後この店も息子に譲り、現在は地区の諸々の事業のボランティアを行なっています。

山砲兵第十九連隊から

第十三軍復員本部勤務へ

愛知県 高野 甲 作

農家の六男として、男五人女一人の兄弟の末男として生まれ、生家は稲作主体で、十反歩の耕作面積の経営規模の農家でした。地元大積小学校を出ると、名古屋の木工関係の工場に働きに出ました。工場の仕事は新建材の天井板の貼布作業でした。

そこで一、二年働いた後、故郷新潟県の郷里から二〇キロ程離れた柏崎の軍需工場に勤務しました。ここ